



タテジマユムシと思われる生き物の口吻（こうふん）



タテジマユムシの本体

タテジマユムシ

泡瀬干潟を散策していると、砂の上で、ピンッとあったゴムがプツリと切れるように、砂にもぐる生きものが目撃される。何かと思って、あわてて近づくと、そこには砂しかない。

この生きものは、ユムシといって、分類的にはユムシ動物門キタユムシ目キタユムシ科に属する。本体は、砂の穴深くにいて、なかなか見ることはできない。泡瀬干潟の浅瀬で、よく見られるユムシであるが、干潟であれば、どこにでも観察できる生き物ではないらしい。

写真（左）は胴体ではなくて、約2cmほどの口吻（先の白い部分）を長く伸ばしている様子である。この口吻（こうふん）を伸ばして、周囲の生物由来の有機物（デトリタス）を集めて食べている。写真（右）は、たまたま干潟の表面付近に出てきていたタテジマユムシの本体である。体の表面には、赤色の筋（すじ；しま模様）が数本あるのが分かる。これが、名前の由来ともなっている。

写真（右）は、向かって右側が頭であり、干潟の表面でまるでベルトコンベアのような口吻を長く伸ばしてエサを食べている。

干潟は、一見すると何もない平坦なところのようだが、地面（砂や石、泥）の下には様々な生き物がすんでいる場所である。